



女性医師の窓

Around 40

金沢大学附属病院血液内科 林 朋恵

怒涛の研修医時代から北陸三県の各総合病院を勤務してわたり、その後大学病院で研究生活、その間、結婚し、3人の娘、息子に恵まれるまで14年、本当にあっという間でした。この間、自分の立場が大きく変動する中で、1人の女性としての価値観や考え方も大きく変化したように思います。

私がようやく結婚できた?!のは32歳。それまでは血液内科医として1年365日、患者さんを回診し、入浴中も携帯電話を傍におく生活をしてきました。もちろん失敗やトラブルもあり、冷や汗をかいたことも数知れず、それでも仕事が好きでしたし、充実した日々を過ごしていました。しかしその頃の私といえば、、、将来について考えることなど微塵もなく、そのせいか家庭を持つ女性医師に対して正直、同性としての親近感すらわからない状況でした。弁解するようですが、その頃は素晴らしい上司に出会い、そのあふれるばかりの知識や洞察力に触れ、一步でもその理想に近づきたい、と私なりに燃えて!!いた時期でもあります。しかし、結婚し、出産、子育てを始めた時点で状況は一変しました。特に私の考え方の大きな転換点となったが、夫の留学に便乗したアメリカ合衆国での生活です。1歳の娘とともに夫に遅れて渡米し、その後すぐに2人目を妊娠するわけですが、いきなりの専業主婦にまったくなじめない日々、、、つわりもひどく、現地で知り合った企業の駐在員の奥さま方(大概非常に裕福です)にもなじめず、自分のキャリアが途切れることへの焦りばかりを感じ、愚痴ばかりのメールを日本へ送っていました。とはいえ、すべて時間が解決!!つわりがおさまると活動範囲も広がり、徐々に気の置けないお友達もできてきました。こうなれば楽しいものです。現地での妊娠、出産もよい経験でした。妊娠経過中1回しかないエコー検査、体重増加にもほとんど頓着しない産婦人科スタッフ!自覚する陣痛はたったの2回ですんだ無痛分娩、ルームサービスで選択する入院中の食事、朝の6時に回診する産婦人科医師などなど、日本での妊娠、出産とは大きく違っていました。子供のプレスクールのイベントもまさにわくわく、ドキドキ!主人と協力して娘の誕生日パーティーを開いたときも本当に達成感がありました。留学された方はよく経験されると思いますが、現地ではより家族の存在が大きくなります。家族と過ごす時間が増えることもありますが、異国の地で少なからず不安な気持ちをかかえ生活する中で、家族の大切さ、暖かさを再認識する良い機会になると思います。アメリカ社会全体が家族優先であることも日本人にとっては良い刺激になるのではないのでしょうか?

こうした経験を経て、今は大学病院で外来中心ではありますが、フルタイムで働かせていただいています。子供は3人、病気もしますし、可愛いばかりでもなくなります。日々の家事は疲れた体にドットのしかかってくるし、まず、内科医として勉強ができない!!病棟を担当できない!!これが最大の問題であり、女性医師が自信をもって診療できない理由でもあると思います。ただ、今、思うのは、すべてを手に入れるのは難しい、良い意味での妥協と、その中でも自分にとって一番大切ものを意識すること。これが40歳を目の前にしての感想です。とりとめのない文章ですが、最後にいつも私を支えてくれる夫、子供たち、祖父母に感謝しつつ、このエッセイを終わりたいと思います。